慶應義塾醫学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160—8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時　午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

新執行部発足

10月1日より、医学部・病院とも新しい執行部がスタートした。4期目を迎える末松誠医学部長、このたび病院運営を担うことになった竹内勤病院長のもと、医学部100年、新病院棟建設に向けて大いなる一歩を踏み出す。医学部は医学部長補佐4名と大学院医学研究科委員長が1名、病院は副病院長5名での体制となる。

【この度就任した研究科委員長・医学部長補佐・副病院長による抱負は本紙3面に掲載】

医学部

医学部長
医化学教授
末松　誠（62回）

大学院医学研究科委員長
生理学教授
岡野　栄之（62回）

医学部長補佐（研究・教育、国家プロジェクト担当）
先端医科学研究所遺伝子制御研究部門教授
佐谷　秀行（60相当）

医学部長補佐（診療、医療情報二次利用担当）
皮膚科学教授
天谷　雅行（64回）

医学部長補佐（教育担当）
病理学教授
坂元　亨宇（64回）

医学部長補佐（研究、国際イノベーション拠点担当）
坂口光洋記念システム医学講座教授
洪　実（65回）

病院

病院長
リウマチ内科教授
竹内　勤（59回）

副病院長（医療安全担当）
小児科教授
高橋　孝雄（61回）

副病院長（診療部門（外来）担当）
精神神経科学教室教授
三村　將（63回）

副病院長（診療部門（入院・救急診療施設）担当）
外科学教室（一般・消化器）教授
北川　雄光（65回）

副病院長（医療情報・臨床研究担当）
泌尿器科学教授
大家　基嗣（66回）

副病院長（職場環境・看護担当）
看護部長
鎮目　美代子

新病院棟建設 スタートに向けて

プロジェクトの概要と事業推進体制

新病院棟建設企画担当　渡辺　真純（64回）

本年9月の慶應義塾理事会と評議員会において「大学病院1号館（新病院棟）新築工事など」についての稟議が承認され、設計施工を担当する竹中工務店との契約が完了しました。いよいよ新病院棟建設に向けての工事が本格的にスタートします。

昨年9月の理事会、評議員会において「医学部創立100年記念　新病院棟建設事業募金」が協議され、新病院棟建設計画が承認されたのを受けて、本年1月に設計監理監修者として日揮が、設計施工者として竹中工務店が選定され、本プロジェクトの中核である1号館の設計作業が進められてきました。

プロジェクトを進めるにあたっては新病院棟建設実行委員会のもとプロジェクト推進会議が設置されその事務局である新病院棟開設準備室がメインエンジンとなり事業が展開されています。

本年2月には40を超える院内外のワーキンググループが組織され、半年間にわたる設計作業が行われ7月の時点で基本設計が完了しました。

1号館建設予定地は中央棟北側、6、7号棟、放射線治療棟、CT—MR棟および臨床講堂などのエリアとなります。工事は1期、2期およびエントランス棟建設の3ステップで行われ、2017年度に1号館の2期部分が竣工し、引き続きグランドオープンを目指す予定です。その後に既存棟の解体とエントランス棟の建設が行われます。

建築面積は8798平米、延べ床面積は74609平米で地上11階、地下2階の鉄筋コンクリート造（一部鉄骨造）で免震構造を備えます。この建物は主に外来と中央診療部門を配置する地下1階から地上6階までの低層部と病棟を配置する7階から10階の高層部からなります。ここに約800床の病床（集中治療系を含む）を設け、現外来機能のおよそ80%を移転させます。高層部の病棟部分には1フロアあたり4病棟（看護単位）を設置します。各病棟には「K」「E」「I」「O」と命名し、例えば10K病棟、9E病棟などと呼称するプランが進められています。これらに加え中央診療部門として中央手術室(27室)、CT、MRなどの放射線診断部門、血管内治療部門、放射線治療部門、内視鏡センター、輸血・細胞療法部、血液浄化・透析センター、病理診断部門などを設ける予定になっています。（図1、2、3、4、5）

【新病院棟建設の詳細な計画については2面に掲載】

図1　1号館完成予想図

図2　信濃町キャンパス鳥瞰図と既存施設解体エリア（左下）

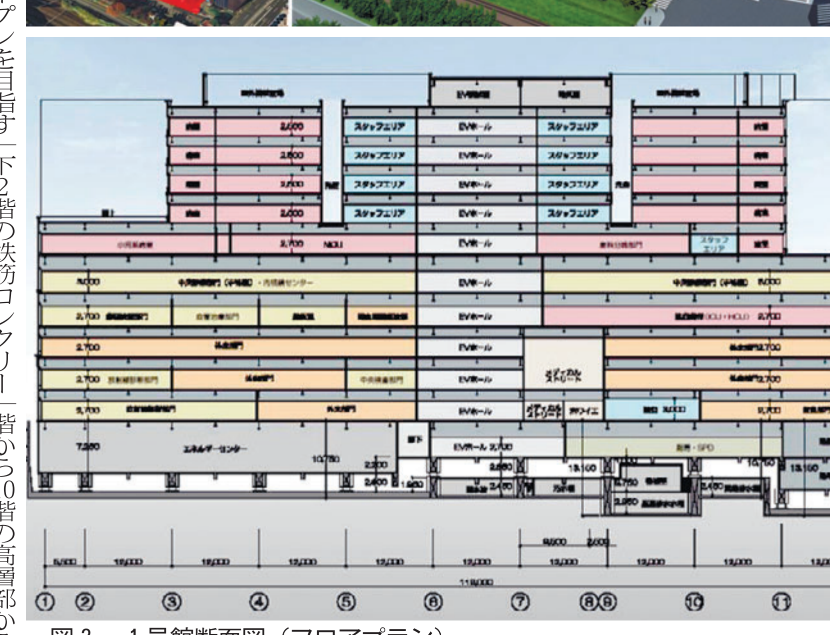

図3　1号館断面図（フロアプラン）

図4　1号館エントランス外観予想図

三四会募金学年幹事会 キックオフに当たって

三四会募金委員会
委員長（評議員会議長）　吉野　肇一（44回）
副委員長（理事）　黒瀬　巌（65回）

渡辺真純理事（新病院棟建設企画担当教授、64回）が別項に詳細を掲げた医学部創立100年新病院棟の建設に当たっては、300億円の経費が見込まれ、そのうちの140億円が塾より、60億円が医学部・病院より支出され、あとの100億円が募金に割り当てられている。そのうち、60～70億円が一般塾員ないし企業よりで、あとの30～40億円が三四会に期待されている募金額である（図）。

しかしこの、30～40億円という数字が、きわめて大きいものであることは、信濃町キャンパス2号館（旧称、新棟）建設に特化した塾創立125年記念事業募金時の、好景気下、武見三四会長（当時）の強力なリーダーシップで、三四会実績が37億円であったことのみならず、塾創立150年記念募金がつい3年前まで行われたことから、明らかである。なおこのときの、2号館建設に要した費用が180億円であったことを考えると、冒頭に述べた300億という数字の大きさを実感できよう。

このような実状を、比企三四会長は、塾評議員・理事の立場から早くから把握されており、今回の募金活動が開始された本年初めより、三四会内に募金委員会を設置することを提唱され、本年6月の三四会評議員会で承認されたのち、以下のメンバー（会長指名）でスタートした（委員長・副委員長はタイトル欄）。委員：熊井浩一郎（監事、46回）、水野嘉夫（副会長、47回）、武田純三（理事、病院長［当時］、52回）、久慈直昭（評議員、61回）、中川種昭（理事、64相当）、深川和己（理事、68回）、宮川義隆（理事、70回）　顧問：会長、渡辺（理事、新病院棟建設企画担当教授、64回）

早速、8月26日に第1回委員会を開催し、募金学年幹事会の立上げを決議し、9月の理事会で承認を受け、現在、そのキックオフミーティングに向かっているところである。

以下、この「三四会募金学年幹事会」について、述べ、さらに関連するところの、過ぎ去った塾創立125年・150年事業についても触れさせていただきたい。

前述のように、過去に例を見ないほどのきわめて多額の募金事業を行うに当たっては、現時点で考えられる限りの執行組織を作らなければならない。そこで、実働年代と考えられる37～90回の卒年ごとに、その任に最適と考えられる数名（クラス評議員、体育会・文科系団体責任者、各種催事役員経験者や、リーダーシップの顕著な会員など）による組織を立ち上げることになった。その推薦を各クラス評議員にお願いし、現在までに90名を超える被推薦者がリストアップされており、それらの会員に三四会募金学年幹事への就任に係わる承認を取っている過程にある。

そして、10月12日（土）にホテルオークラ東京で開催される、恒例の「三四会支部長会」の直前に、戸山芳昭塾常任理事（信濃町新病院棟建設募金事業戦略会議議長、54回）および末松誠医学部長（62回）の参加のもとに、このキックオフミーティングを開催するに至った。

この間の経過に関して、いささか性急であるとのそしりを免れることは困難ではあるが、募金活動の常として、スタートダッシュが成功の鍵の一つであることから、敢えてこのようなプロセスを選んだことにご理解をいただきたい。

最後に、今回の医学部創立100年と、過去の塾創立125年および150年事業について、蛇足ながら、若干の見解を述べさせていただき、今回募金事業成功の一助としたい。

冒頭部分で述べたように、1983年の塾創立125年募金のほとんどが、大学病院2号館（旧称、新棟）建設に費やされたこともあり、150年事業では信濃町キャンパス以外の老朽化した教育施設の拡充が主なものであった。それでも医学部・病院に対し、別館跡地への3号館建設等が行われた。またその際、主に三四会員より新病院棟建設のためにとご寄付いただいた部分は約12億円にも達したのである。それについては塾内資金として、現在もしっかりと保全されており、ご寄付いただいた浄財額はそのまま、今回の医学部100年募金事業実績として記録され、将来的には今回の募金額と合わせて、『三田評論』および『慶應義塾醫学部新聞』で広示される予定である。

125年時の新棟（当時）建設時、塾からの支出予定が30億円であったのにもかかわらず、今回のそれは140億円という巨額となっている。これは、今回すでに実行に移されているプラン（別項、渡辺記事）が、今後の1世紀を見越しての、「世界に冠たる総合医学府」をこの信濃町キャンパスに構築しようという医学部・三四会のみならず塾全体にとってもこれまで類をみないほどの遠大な意思表示であり、5年前の塾創立150年記念事業における病棟計画をベースに持つものの、それからは著しく進展したところに、塾全体で舵を向け、大きくギアチェンジをしたことにほかならない。

図でも明らかなとおり、塾員・企業に三四会割当て以上の寄付をお願いすることなどを考えると、ぜひとも三四会に期待されている募金額を達成して、総額100億円の本募金事業を成功させたい。

100年に1度のこの、文字どおり「超」がつく大事業を完遂することができますよう、会員諸氏には、前述のような事情よりご無理を承知の上で、絶大なるご理解とご協力を切にお願い申し上げる次第であります。ご意見等、三四会事務所あてに多くお送りいただき、この募金活動を三四会全体で盛り上げていただければ幸いです。

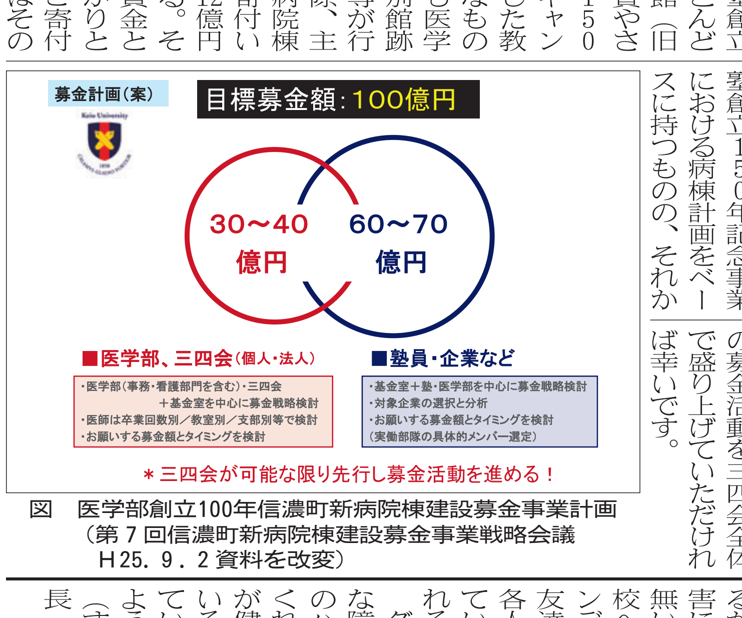

図　医学部創立100年信濃町新病院棟建設募金事業計画
（第7回信濃町新病院棟建設募金事業戦略会議 H25.9.2資料を改変）

鑑往知来

ダウン症の娘を授かって、12年になる。知的にはかなりゆっくりだが、大きな内臓疾患はなく彼女のペースで順調に育っている。しかしこの間、そして今後も「障害」という言葉が、本人には何の非も無い訳だが、いつも付いて回る。

健常と比べると能力が少ないから、何かを行なうにあたり「差し障りがある」という意味である。

本来はその差し障りという意味で、障「碍」あるいは障「礙」という字を用いるのだが、当用漢字の制定と同音の漢字による書き換え等により「害」という字に置き換えられてしまったようだ。障「害」と書くようになると、「害」という文字が持つ何とも言えない悪印象のため、本来の差し障りの意味から離れてしまい、まるでハンディキャップがある人の存在そのものが社会にとって害になっている、とでも言わんばかりの全く誤ったイメージを人々に植え付けてしまう事にもなりかねない。

そもそも健常を基準にするから、何かが足りず差し障るという事になる訳で、健常を尺度にして考えること自体に問題があるのではないだろうか。うちの娘の場合、同年代の小学6年生に比べれば、その10パーセントの能力も無いであろうが、養護学校での毎日を精一杯、100%の力を出し切って頑張っている。彼女の中では100%なのである。そして、健常と比べると出来る事が少ないのは事実ではあるが、少なくとも社会の害になっている事は一切無い。毎朝、娘を養護学校へ送り、さまざまなハンディキャップを持つ学友達に接すると、各人が各人の100%で頑張っていることが肌で感じ取れる。

ダウン症をはじめ様々な障碍をもつ人達が、そのハンディを引き受けてくれるからこそ、健常者が健常に生を与えられていることを担保してくれているのだと、心に刻むようになった。

（すわやまクリニック院長　目黒区医師会理事　田島厳吾　72回）